

Go! Go! Graduates!

国際協力と平和活動、教育と医療、農業と社会福祉・・・80人以上のアジア学院の日本人卒業生は国内外で様々な分野でリーダーシップをとり、人々と共により公平で平和な明日を作り上げている。

共に食べものを作る

やまざき まさる

山崎 勝さん (98年卒・99年研究科生)

山崎さんがアジア学院を卒業してから約20年が経ちますが、学院での経験は今日まで彼自身に影響を与えています。現在、彼は(特活)日本国際ボランティアセンターでカンボジア事業担当として働いています。地域の農民に対し、およそ20人の現地職員と共に環境に配慮した米や野菜、果樹栽培の研修プロジェクトなどを行っています。また、お茶やピクルスなど、長期保存が可能で且つ農産物の付加価値を高める食品加工技術についても教えています。彼らや次世代の人々に継承される土地を守るため、若者を対象に環境教育と森林管理についても教えています。

山崎さんはアジア学院に来て「食べものを作ること」をはじめて経験します。以降、このことが彼の生涯を貫く仕事の一部となりました。しかし、アジア学院で学んだことの中でもっとも役に立ったのは、地域の繋がりの中で生きることや異なる文化の人々との交わりの大切さだと気づきました。共に生きること、人々との繋がりを深めることは、農村開発をはじめめる際の第一歩であり、それは単純に現地の人々と言葉を交わすことから始まります。「アジア学院で学んだことをまずそのまま実践する。つまり、他の職員やカンボジア人の別なく、『人を管理する』とかいうのではなく、彼らと共にやってみるとか考えるとか…。常に村人と共にあり、話や議論をすることがとても大切なのです。」



カンボジアで地元の農民と田植えをする山崎さん(右)

地域改善を地域社会と一緒に

かわぐち けいこ

川口 景子さん (02年卒)

川口さんが所属している団体・NPO 法人アーシャ=アジアの農民と歩む会は、主に北インドウッタール・プラデーシュ州アラハバード県の農業大学の継続教育学部(MSCNE)の活動を支援しています。MSCNEでは、持続可能な農業・開発コースを毎年行い、インドや近隣諸国の農村の青年、NGOや教会の開発ワーカーが毎年学んでいます。また、零細農民や日雇い労働者、低層カーストの農村住民と設立したアラハバード有機農業組合での生産・加工・販売、裁縫を通じた農村女性の人材育成、農村女性自身による農村母子保健の状況の改善活動や、僻地農村学校の支援を行い、持続可能な農村の発展に向け人づくりを中心に活動しています。総務・会計・調整員という立場で彼女は各活動に関わり、現地の人と共に考え、何度もやり直しながら地域の経験を積み重ね、学びや、祈り、喜び、忍耐も共有しています。「アジア学院で学んだ姿勢は、様々な困難や不足のある途上国農村において最大限に発揮される」と川口さんは実感しています。

アラハバードの子供たちと



INTER

VIEW



2012年度卒業の

武野祐太さん

どんな仕事をしていますか? — 東京にある開発コンサルタントで働いています。アフリカや中南米の農村開発プロジェクトの国内でのサポート業務や、JICAへ提出するプロポーサルの補助業務をしています。

アジア学院での学びやスピリットをどのように活かしていますか? — 仕事を始めて4カ月しか経っていないので、仕事という点でアジア学院スピリットを活かしているかわかりません。開発コンサルタントの仕事は3年~5年でプロジェクトが終了するものが多く、プロジェクト終了後に現地に多くの課題が残ることが在ると僕は考えています。そのことから、より現地の方(農民)の視点を意識して活動できればと思っています。

日常生活では食べ物に気を配っています。東京ではアジア学院にいた時のような食生活は難しいですが、食材選びや、電子レンジを使わない等、工夫をしながら生活しています。

卒業生同士やボランティアとの繋がりはありますか?

— 卒業生とは時々フェイスブックで繋がることがあります。また、僕は昨年マラウイに青年海外協力協会の農業研修に参加し、アジア学院時代のクラスメートに再会し、今年の3月にはインドネシアと東ティモールを訪問し、4人のクラスメートと卒業生に再会しました。それぞれの環境でアジア学院で学んだことを懸命に伝える彼らの活動には感動しました。

将来の計画、夢を教えてください。 — 「腹を空かせて苦しむ人を少なくする」これが、僕の目標です。現在の仕事に取り組みながら、国際機関への就職や、草の根活動、大学院進学、作物栽培を学ぶ等、これからのステップを考えていこうと思います。

文 - スティーブン・カッティング
文・インタビュー・翻訳 - 佐藤裕美

多文化圏で経験を生かす

むらかみ たけし

村上 健さん(86年卒)

村上さんがアジア学院の学生になった時、まだ日本人学生の募集は非公開でした。当時、テレビでアフリカの飢餓のニュースを見た村上さんは、食糧自給という方法で支援したいという思いに駆られ、そのための必要な技術を身に付けることを志しました。その後、たまたま参加した京都YMCAのプログラムでアジア学院を知るやいなや、「日本人でも学生になれるのか」と職員に問いかけました。このようにして彼はアジア学院の学生となり、翌年は農場のボランティアとして1年間奉仕しました。

「夢かうつつか、わからなかったよ。」と彼は当時を振り返ります。それまで外国人と話す機会はなかったのに、ルームメイトはアフリカ人。日常的に農業に携わり、会話は全て英語という生活。クラスメートからは「ケン」と呼ばれ、年齢的にもクラスメートの子供の世代だったので、彼らの息子のようにかわいがられました。アジア学院を去った後は青年海外協力隊員として(アフリカを希望していたものの)パラグアイに赴任、現地の農産物であるサトウキビの繊維から作ったボカシを使った野菜栽培の普及などを行いました。パラグアイから帰国後はアジア学院で4年間勤め、その後九州で有機栽培のブドウ農家になりました。今は、別府市の立命館アジア太平洋大学で事務局長を務めています。この大学では学生のおよそ半分が外国人なので、特に異文化圏の人々の理解にはアジア学院での経験が非常に役に立っているそうです。

さて、彼のアフリカに行きたいという夢、ですが、これは3年前に実現しました。農業を普及するという目的の代わりに、大学で学ぶ優秀な人材を探すためです。若い現地の人々が教育を受け、また活躍することによって、アフリカの将来に貢献することになるでしょう。

